様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２９６２

研究課題名（和文）教室談話に関する専門的力量形成めざした英語教師研修プログラムの開発

研究課題名（英文）Developing an English language teacher education program ehancing professional expertise on classroom discourse

研究代表者
吉田　達弘（Yoshida, Tatsuhiro）

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：１０２４０２９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，英語教師の教室談話に関する専門的力量形成に資することを目的とし，(1) 教師と児童・生徒間の相互行為によってどのような教室談話が形成され，学びが促されているかを明らかにすること，(2)教師の省察を促す教室談話分析の枠組みを開発し，(3)教室談話に関する専門的力量形成を行う英語教師研修プログラムおよびガイドブックの開発をめざした。また，研究期間中に，教師の省察を促す同僚及び教師教育者(研究者)のかかわり，および，教師の省察を支援するデジタルツールについての研究が加わり，当初の目的よりも研究の範囲が拡張されることとなり，それらを統合する形でガイドブック(β版)の開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，英語教師が，自身の授業リフレクションを行う教室談話に関する専門的な力量を形成することを目指した。具体的には，英語教師と同僚，教師教育者（研究者）が協同的に授業を振り返るための理論的枠組みや方法を提示し，これに，デジタルツールを加えることで，相互行為的に授業に対する理解を深めていくことを支援するものである。今後，教職課程や教員研修の中で活用されることを目指している。また，取り組みの中では，言語教師教育研究に携わる国際的な研究者を招聘し，オープンなワークショップを開催するなど，英語教育関係者にも研究の知見を共有する機会を設けた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop ways in which English teachers professional competence on classroom discourse. Specific objectives included (1) understanding how classroom discourse is formed and learning is facilitated by the interaction between teachers and students, (2) developing a framework for facilitating teacher's understanding of classroom discourse, and (3) demonstrating an English teacher training program and guidebook for professional development. During the study period, the following additional objectives were pursued; the dialogic engagement of colleagues and teacher educators (researchers) in collaborative reflective practicce, and the use of digital tools to support teacher reflection. The guidebook (beta version) was developed by integrating the findings from the research above.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語教育　授業研究　教師教育　社会文化的理論　二人称的アプローチ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2020 年度以降に施行される学習指導要領では，小学校での英語の教科化や早期化，また，高等学校に加えて，中学校でも，英語授業の使用言語を原則英語とすることが盛り込まれた。また，４技能 5 領域における到達目標も明確に示され，学習内容の高度化が図られた。英語授業は，英語と日本語が併用される点，さらに，日本人教師と英語母語話者教師のティーム・ティーチングが行われるなどの点で，生徒同士が行う言語的・非言語的やりとり(以下，これを「教室談話(Classroom Discourse)」と呼ぶ)は複雑である。このため，学習内容の高度化がとともに，英語教師の専門的力量として，教室談話を理解すること，また，そのような理解に基づいて授業実践を行うことが求められる。

２．研究の目的

上記のような背景をもとに，本研究では，英語教師の教室談話に関する専門的力量形成に資することを目的とし，以下のような目的を立てた。(1) 教師と児童・生徒間の相互行為によってどのような教室談話が形成され，学びが促されているかを明らかにすること，(1)をもとに，(2)教師の省察を促す教室談話分析の枠組みを開発し，(3)教室談話に関する専門的力量形成を行う英語教師研修プログラムおよびガイドブックを開発すること。

上記(1)～(3)を目的として掲げ，研究を推進したが，研究期間中に，教師の省察を促す同僚及び教師教育者(研究者)のかかわり，および，教師の省察を支援するデジタルツールについての研究が加わり，当初の目的よりも研究の範囲が拡張されることとなった。

３．研究の方法

本研究では，以下のような取り組みを行った。

（1）教師の教室談話に関する専門的力量を高めるための枠組み

応用言語学および第 2 言語習得研究における授業場面における教室談話に関する先行研究を検討した。なかでも，教室談話の研究に基づいた言語教師の授業に対する省察の枠組みとして，Walsh による「教師発話の自己評価(Self-Evaluation for Teacher Talk，以下，SETT)」に注目した。SETT は，授業中の発話パターンとして現れる領域(mode)を包括的に示していることから，SETT を基盤として，英語教師の専門的力量を高める枠組みを検討した。

（2）教師の省察に対する対話者のかかわりに関する研究

授業研究では，授業について協同的に考える同僚や教師教育者(研究者)など「対話者」の存在があることで，教師の経験や気付きの言語化を促すことが一層可能となる。その際，授業者と対話者の関係性をどのように構築すべきかについて議論するために，社会文化理論における応答的媒介行為(responsive mediation)（Johnson & Golombek，2016），二人称的アプローチ(a second person approach)（佐伯，2017，2018；レディ，2015，2017），さらに，教師の協同的成長(cooperative development)（Edge，2002)をまとめ，実際の授業研究で活用した（吉田，2020；Yoshida，2020 にて報告）。

(3)教師の省察を支援するデジタルツールについての研究

上記，(1)，(2）の内容を支援するデジタルツールとして，Video Enhanced Observation (以下，VEO) (VEO Inc.)を活用した。VEO は授業場面を撮影し，分析することができる iPad アプリケーションであるが，実装されたタギングの機能を使うことで，授業場面への意味づけや，授業者にその場面を想起させ，状況の中で自らの行為を省察(reflection- in-action, Schön, 1986)することができる。

４．研究成果

（1）教師の教室談話に関する専門的力量を高めるための枠組み

Mann and Walsh (2017)は，近年，リフレクティブ・プラクティス（Reflective Practice: RP）が教育現場で広く実践される一方， RP が，個人の内省的作業にとどまっていること，ジャーナルなどの書かれた言語に依存する度合いが大きくなっていることから，この点を克服するために，授業者と同僚や教師教育者が，ビデオや録音などのデータを用いながら，対話的に授業への省察を深める方法を提案している。

さらに，Mann and Walsh (2017)は，協同的な RP を行う際に依拠する枠組みとして Self-Evaluation for Teacher Talk (SETT)(Walsh，2006)を提案している。SETT では，モード(mode)と呼ばれる 4 つの発話パターンが示されている。それらは，教師の活動の管理（Managerial mode)，教材・活動（Material mode)，知識・技能（Skills and systems mode)，自己表現活動（Classroom context mode）の各モードである。それぞれのモードは，授業の目標(pedagogical goals)と相互行為特徴(interactional features)で構成されている。

SETT を用いた RP では，教師は，10-15 分程度の短いビデオを録画し，記録された活動や教師–生徒のやりとりが，どのモードにあたるかを同定し，その活動の目標(pedagogical goals)に沿って相互行為特徴が観察されるかを，同僚あるいは教師教育者（研究者）と対話をしながら，観察していく。

本研究では，教師の教室談話に関する専門的力量を高めるための枠組みとして SETT を活用した。ただし，SETT 開発の元データは，第二言語として英語を学ぶ授業を対象としており，ある程度，英語でのやり取りが前提になっていたと思われる。しかし，今後，外国語として英語を学

ぶ(EFL)環境の日本の教室では，日本語と英語の切替（コードスイッチング）が頻繁に行われ，母語使用も教師による援助(scaffolding)の一つとして，相互行為特徴の一つとして含める必要があるだろう。このように，学校（異なる校種）のコンテクストにあうように，修正等を加えていく必要があるが，これについては，今後の研究課題としたい。

（2）教師の省察に対する教師教育者（研究者）のかかわりに関する研究

授業者と同僚，教師教育者，あるいは，研究者（以下，対話者）の間で協同的な RP を実施し，授業者の気付きを深めるためには，対話者の質の高い働きかけを通して，相互行為的な関係を構築していくことが重要となる。本研究では，対話者の働きかけを明らかにするために，①社会文化理論における応答的媒介行為(responsive mediation)，②二人称的アプローチ(a second person approach)，③協同的教師の成長(cooperative development)を取り上げた。

① 社会文化理論における応答的媒介行為

Vygotsky の発達理論を発展させた社会文化理論(Sociocultural Theory, SCT)では，子どもの高次精神機能の発達が，社会的相互行為，特に自分よりも有能な他者の媒介行為(mediation)により促進されるとする媒介原理を基盤とする。Johnson and Golombek(2016)は，この原理を教員養成課程における指導場面に援用し，教師教育者が学生の専門性の発達をどのように媒介すべきかを研究した。教師教育者による媒介行為は，学生が抱える課題を場に即して解釈し，即時的に適切な媒介行為を選択すること，また，学生の側も提示された媒介行為に対して，どの程度感受性を持って応答するかというように，相互行為として成立する。Johnson and Golombek は，このような媒介行為のあり方を，あえて「応答的媒介行為(responsive mediation)」と呼んだ。ただし，質の高い応答的媒介行為がなされたとしても，それが，いつも学生にすんなりと受容され，彼らの専門性の発達に直接的に寄与するわけではない。教師教育者は，支援される学生が，当該の授業場面でどのような情動を抱いたか，また，教職を目指す者としてどのようなアイデンティティ，あるいは，意思を持っているかなど，彼らの個人の内面や認識にかかわる要素に常に目を向けつつ，応答的に媒介していく必要がある。

Johnson and Golombek (2016)の主張は，本研究に対しても示唆に富んでおり，協同的に授業に対する理解を深めるために，教師教育者は，教師の反応，特に，授業の出来事に対する情動面に目を向けながら，応答的に援助を行うことの重要性に気付かされる。この点で，応答的媒介行為は，技術的改善に特化して教え込むコーチングやトレーニングとは異なり，あくまでも，相互行為の中で実現されるものとしてとらえる必要がある。この点については，Yoshida (2020)で具体的な事例とともに議論した。

本研究では，3 年目に Johnson 教授を招聘し，社会文化理論に基づく教師教育，応答的媒介行為についての講義，及び，実際のデータにもとづいたワークショップを行っていただき，参加した多くの教師教育者および英語教育に携わる関係者と知見を共有した。

②二人称的アプローチ(a second person approach)

二人称的アプローチは，本来，乳幼児の発達研究に対する研究者のかかわり(engagement)に関する理論で，発達心理学者のレディ(レディ，2015，2018)によって提唱され，佐伯(2017，2018)が，保育や授業研究の議論へと拡張した。従来の発達心理学では，乳児の他者の心への理解は，3～4 歳を待たなければならないとされていた（「心の理論」）。しかし，レディは，自身の母親としての経験から「心の理論」の妥当性に疑問を持ち，その後，実証実験を重ねることで，乳児が，従来の理論で想定されていたよりもかなり早い時期に，他者の意図を読み取ることができることを指摘した。レディは，こういった事実が見逃されてきた理由として，発達心理学という学問では，その場にいる研究者自身は，できるだけ観察対象から距離をとる「学問的非関与(academic detachment)」(p.6)の立場をとってきたこと指摘し，こういった態度を「三人称的アプローチ(a third person approach)」と呼び（レディ，2017），研究者の対象に対する「二人称的アプローチ」からの情動的かかわりの重要性を指摘した。

佐伯(2018)は，レディの二人称的アプローチを次のように整理している。

1)「一人称的アプローチ(First-Person Approach)」対象を自分(1 人称)と同じ存在であるとみなし，自分自身への内観をそのまま対象に当てはめて類推する。

2)「三人称的アプローチ(Third-Person Approach)」対象を自分と切り離し，個人的関係のないものとして，傍観者的に観察し，「客観的法則」ないし「理論」を適用して解釈する。

3)「二人称的アプローチ(Second-Person Approach)」対象を自分と切り離さないで個人的関係にあるものとして，情感を持ってかかわり，対象の情感を感じ取りつつ，対象の訴え・呼びかけに「応える」ことに専念する。

(佐伯，2018: 21)

佐伯(2018)は，これまでの授業研究が，対象となる児童生徒を傍観者的に観察し，客観的な法則や原理を導こうとする「三人称的アプローチ」に陥ってきたことを批判し，「二人称的アプローチ」で実践にかかわり，I-You 関係の中でリフレクションすることの重要性を主張した。「二人称的アプローチ」では，児童生徒とよりよく，またより深く「かかわる」ために，実践現場の様々な状況に「身を置いて(situated-in)」実践者のありようをリフレクションすることとなる。

佐伯は，授業研究における授業者と子どもの関係において二人称的アプローチを論じている

が，本研究では，二人称的アプローチが，授業研究を協同的に行う人々，すなわち，授業者とその対話者（同僚・教師教育者・研究者）にも拡張できると考える。

③協同的教師の成長(cooperative development)

前節で述べた二人称的アプローチは，授業研究での授業者とその対話者のかかわりやスタンスについて述べたものだが，このアプローチを実質化する方法として，本研究では，教員研修の枠組みである「協同的成長(cooperative development: CD)」(Edge，2002)を検討した。

CD は，教師が同僚とともに専門家として成長するための研修プログラムである。上記でも述べたように，三人称的に進められる授業研究では，授業への技術的批判，改善のためのより良いアイデアの提示が先行し，授業者に寄り添い，それぞれの参加者が授業に対する理解を深化させるというやり取りが必ずしも見られない。CD では，授業について語る者が「話し手(Speaker)」，対話者は「理解者(Understander)」と呼ばれ，会話的(conversational)な談話を用いながら「理解者」が「意図的に話し手のために可能な限り多くのスペースを作り，話し手が創造的にそのスペースを使用するのを助ける」(Edge，2002，p. 25)。

CD はもともと，言語教師が仲間との対等な関係の中で実施することを想定された自己研修の方法である。しかし，本研究では，二人称的アプローチを取ることで，同僚教師だけでなく教師教育者および研究者を含む対話者との間での授業研究にも応用可能であると考える。

（3）教師の省察を支援するデジタルツールについての研究

社会文化理論では，人間のあらゆる活動が，常に道具や記号によって媒介されており，当事者にもっとも適切な媒介物や援助(mediation)を用いることで，その活動に関与する当事者の発達が促されることを理論の前提にしている。ここまで述べてきた SETT,二人称的アプローチ,CD は，いずれも，授業者の理解の深化と専門性の発達を促す媒介物と考えられるが，本研究では，さらに，デジタルツールである Video Enhanced Observation (VEO)の活用を検討した。VEO は，VEO Inc.によって開発された iOS/iPad OS 用のアプリケーションである。授業を撮影し，記録するためのツールであるが，タギング(tagging)機能を実装している。タギングとは，例えば，授業者が自身の発問の仕方について理解を深めたい場合，発問のタイプのタグ（Open Question，Closed Question，Elicitation など）を決めておき，撮影者がリアルタイムで，あるいは，授業後に，発問場面にタグを貼り付けることができる（図 1）。

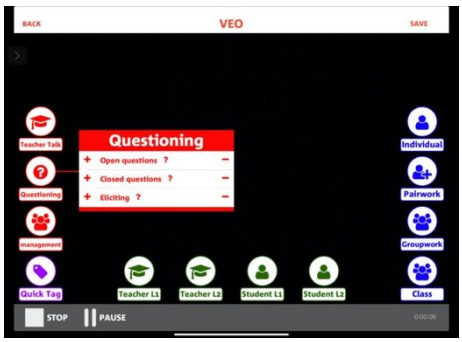

図 1

付与されたタグは，タイムラインに表示され，タップすることで，その授業場面を呼び出し，授業場面における行為にフォーカスして振り返ることができる（図 2）。また，タグごとに並べ替えることで，そのタグの出現頻度も確認でき，グラフでの表示も可能となる。

図 2

上記（1）～（3）に関する研究成果は，吉田（2020）および Yoshida (2020)にとりまとめた（いずれも，2020 年内に刊行予定）。

(4) プログラムおよびガイドブックの開発

（1）～（3）から得られた成果を統合し，本研究の目的である教員研修ガイドブック（β版）にとりまとめた。

ガイドブックの効果を検証するためには，今後，新型コロナウイルス感染症による影響が軽減されたときに，教員グループに参加していただき，ガイドブックを用いた研修を実施することが必要である。このため，本研究でのガイドブックはβ版として公開し，さらにアップデートを重ねる予定である。公開とアップデートは，https://elt-research.com/wp/yoshida/にて行う。

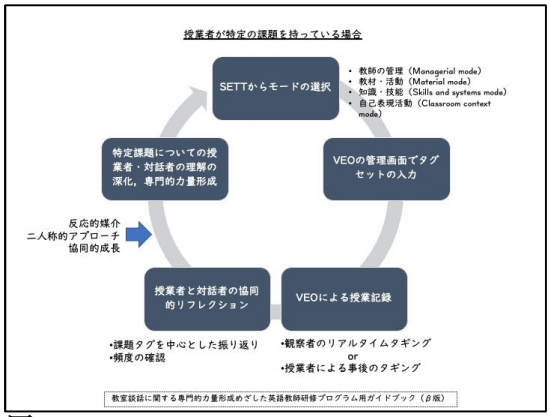

図 3

参考文献

Edge, J. (2002). Continuing cooperative development: A discourse framework for individuals as colleagues. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Johnson, K. E., & Golombek, P. R. (2016). *Mindful L2 Teacher Education: A Sociocultural Perspective on Cultivating Teachers' Professional Development.* Routledge.

Mann, S., & Walsh, S. (2017). R*eflective Practice in English Language Teaching: Research-Based Principles and Practices.* Routledge.

レディ，ヴァスデヴィ 佐伯胖（訳）(2015)『驚くべき乳幼児の心の世界–「二人称的アプローチ」から見えてくること』ミネルヴァ書房.）

レディ，ヴァスデヴィ．(2017)「乳児期におけるかかわることと心への気づき」中山人間科学振興財団 25 周年記念事業特別委員会（編）『発達心理学の新しいパラダイム–人間科学の「二人称的アプローチ」』中山出版．pp.1-4

佐伯胖（2017）「『二人称的アプローチ』入門」佐伯 胖(編著)『「子どもがケアする世界」をケアする:保育における「二人称的アプローチ」入門』ミネルヴァ書房.

佐伯胖（2018）「リフレクション(実践の振り返り）を考える–ショーンの「リフレクション」論を手がかりに」佐伯胖,・刑部育子・苅宿俊文（著） (2018)『ビデオによるリフレクション入門』pp.1-38．東京大学出版会.

Schön, D. A. (1983). The reflective practitioner: how professionals think in action. Basic Books.

VEO Inc. Video Enhanced Observation. https://veo.co.uk

Walsh, S. (2006). Investigating Classroom Discourse. Routledge.

Walsh, S. (2013). Classroom Discourse and Teacher Development. Edinburgh University Press.

Walsh, S., & Mann, S. (2015). Doing reflective practice: A data-led way forward. ELT Journal, 69(4), 351-362. https://doi.org/10.1093/elt/ccv018

Yoshida, T. (2020). A second-person approach towards understanding English language lessons: A sociocultural analysis of the post-lesson conversation. The European Journal of Applied Linguistics and TEFL, 9(2), TBC.（2020 年 11 月発行予定）

吉田達弘.(2020).「『二人称的アプローチ』による英語授業研究の試み」JACET・淺川和也・田地野彰・小田眞幸編)『英語授業学の最前線』(JACET 応用言語学研究シリーズ　第１巻）東京：ひつじ書房．（2020 年 9 月刊行予定）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Yoshida, Tatsuhiro	４．巻 9
２．論文標題 A second-person approach towards understanding English language lessons: A sociocultural analysis of the post-lesson conversation.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 The European Journal of Applied Linguistics and TEFL	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 吉田達弘
２．発表標題 二人称的アプローチによる授業研究：教師の情動的体験への接近
３．学会等名 関西大学英語教育連環センター主催講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田達弘・西郷正輝
２．発表標題 VEOを活用した対話的な英語授業のリフレクション
３．学会等名 外国語教育メディア学会第58回全国研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田達弘
２．発表標題 学びの実践者の協働の場としての授業研究
３．学会等名 全国大学英語教育学会ジョイントセミナー(第1回)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田達弘
２．発表標題 「英語授業研究」の研究から見えてくること
３．学会等名 JACET英語教育セミナー（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 吉田達弘
２．発表標題 社会文化的理論からみた 学習者の学びー言語の学びの種はインタラクションにあるのか？ー
３．学会等名 外国語教育メディア学会関西支部2016年度秋季大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Yoshida, Tatsuhiro and Imai, Hiroyuki
２．発表標題 A collaborative professional development project between the teacher educators and the Japanese EFL teachers
３．学会等名 10th International Conference on Language Teacher Education（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Tsui, A.M.B	４．発行年 2020年
２．出版社 Cambridge University Press	５．総ページ数 －
３．書名 English Language Teaching and Teacher Education in East Asia: Global Challenges and Local Responses	

１．著者名 一般社団法人大学英語教育学会・淺川和也・田地野彰・小田眞幸	４．発行年 2020年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 －
３．書名 英語授業学の最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

tyoshida's office ブログ
http://elt-research.com/wp/yoshida/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	今井　裕之 (Imai Hiroyuki) (80247759)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	
研究分担者	松井　かおり (Matsui Kaori) (70421237)	朝日大学・保健医療学部・准教授 (33703)	
研究分担者	テーラー　マーク (Taylor Mark) (40514443)	兵庫県立大学・総合教育機構・外国人教師 (24506)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	名部井　敏代 (Nabei Toshiyo) (20368187)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	